

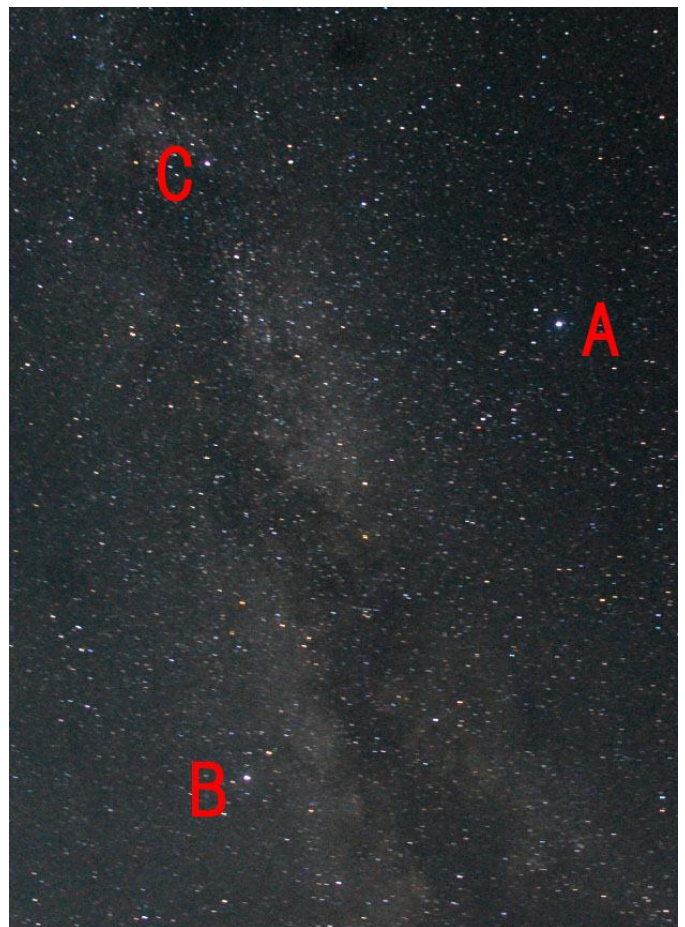
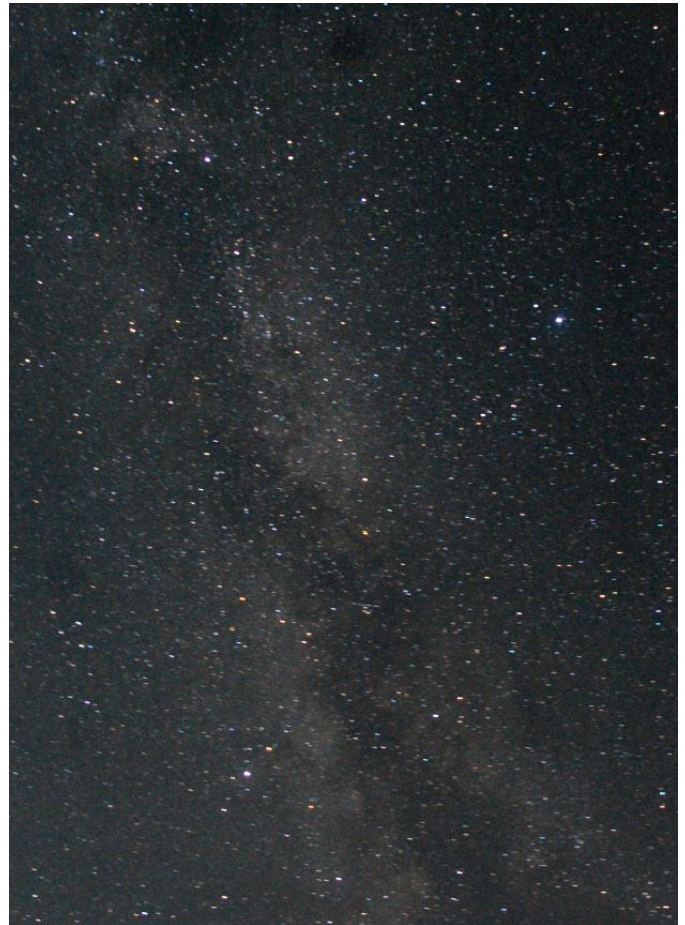
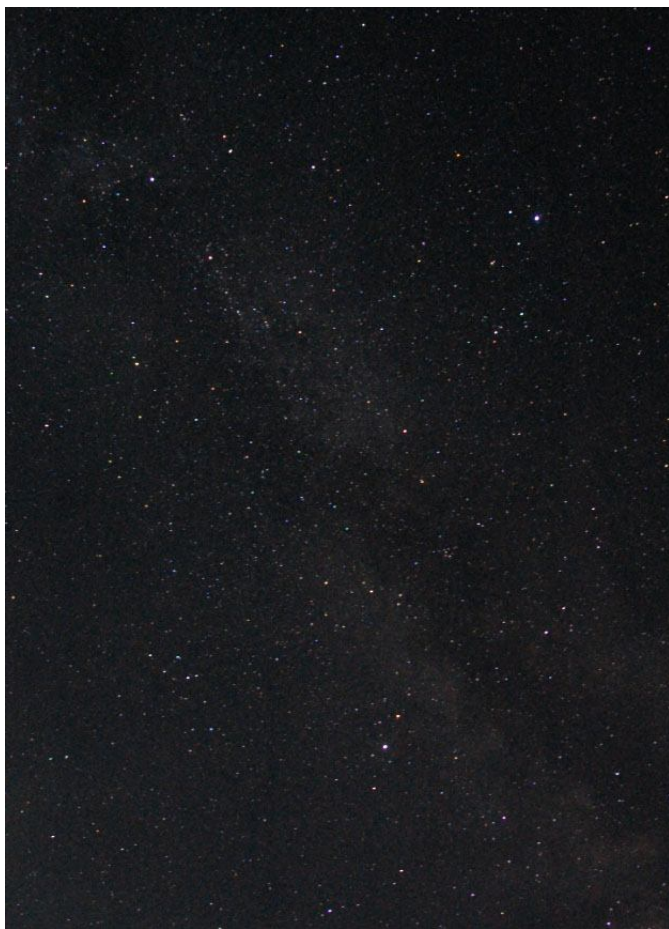
「夏の天体観望(4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

天の川というのは、非常に遠い空間にある恒星の集まりである。理論的には約 2000 億個の恒星が見えているはずで、そう考えると「夜空は光で満たされる」はずだ。しかし、太陽系から見た恒星は、あまりにも遠く、あまりにも「疎」である。



この写真は「夏の大三角」付近の天の川の姿だ。恐らく、部屋を暗くして、PCモニター上で見た時が、肉眼で天の川を見た様子に一番近いと思う。

よく星座の本や教科書に載っている天の川の写真は、見た目よりもかなり明るく、誇張されて表現されている。たとえば、右上のような写真だ。長時間の露光で撮影すると、等級の低い暗い星や、淡い星雲まで写るので、このようになる。しかも、天の川自体が明るく写っているので、手前の「暗黒物質」まではっきりとわかる。目の良い人は、夏の大三角付近で、天の川が2つに別れていることに気づくだろう。

B=こと座ベガ(織姫) B=わし座アルタイル(彦星)  
C=はくちょう座デネブ